

発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと感性的表現力の 向上の取り組み — 5歳児への第3回目の指導と考察 —

長 川 慶

岐阜聖徳学園大学短期大学部

Efforts to Improve Competence and Emotional Expressiveness in Preschool Children's Presentation Activities Through Singing Instruction: The Third Research Study and for 5-Year-Old Children Analysis

Kei NAGAKAWA

キーワード：発声指導 幼児 領域表現 歌唱 頭声

I. はじめに

幼児期の教育・保育において、歌唱活動は重要な役割を果たしている。このことは、ルソーやフレーベルなどの先人が歌唱を用いた教育・保育を提唱した歴史や、歌唱活動が子どもたちの生活の中に溶け込んでいる保育現場の現状に如実に現われている。

しかしながら、保育現場でのフィールドワークを通じて、歌唱活動で、子どもたちが競うように声を張り上げてどなるように歌う様子が散見されたこと、さらに、子どもたちのそのような歌声に対し、保育者が問題意識を抱えながらも、有効な解決策が見いだせていない現状から、歌唱（表現）を通じて感性を陶冶していくというねらいが必ずしも十分に達成されているとは言い難いのではないかと考えた。

そこで、現場の保育者が実用できる歌唱指導メソッドの開発を目的に、2019年よりプロジェクトをスタートさせた。研究は現在も継続中である。本プロジェクトでは、歌唱指導メソッドの開発にとどまらず、子どもたちの歌声を改善し、表現力を向上させることでより質の高い感性を養うことも視野に入れている。なお、本プロジェクトの概要や着想に至った経緯や研究の必要性、考え方等については、巻末の注・文献を参照されたい^{1) 2) 3)}。

本稿では、プロジェクトの活動の中から、5歳児に対して実施した第3回目の指導に焦点を当て考察する。プロジェクトでは、筆者（研究者）自身が保育現場に出向き、実際に子どもたちへの指導を通じて指導のノウハウを蓄積する方法を採用している（Covid-19の影響により、現在保育現場での指導は中止している）。また、子どもたちの発声方法として、裏声（頭声）を使って歌唱するスタイルを特徴としている。本稿で考察する第3回目の指導は、子どもたちが裏声（頭声）と地声（胸声）の違いを実感し、さらにそれを歌唱につなげていく活動として成果があったと考えている。したがって歌唱指導メソッド構築の際に指導手法として取り入れることを念頭に、実践方法について振り返り、考察をおこなう。

II. 指導の計画

1. 指導の概要

指導は、岐阜市にある2つの幼稚園（重点協力園）で実施した。なお、2園ともに、筆者が研究をスタートさせるまで、外部講師などによる特別な音楽活動はおこなっていなかった。

（1）A幼稚園

実施日：2019年9月11日

実施方法：学年全体への一斉指導
指導対象者：年長（５歳）児

（２）B幼稚園

実施日：2019年9月6日
実施方法：クラス毎の指導（年長3クラス×3回）
指導対象者：年長（５歳）児

2. 指導計画

（１）本時のねらい

本時の活動は、以下をねらいとして計画を立案した。

- ① 前回（第2回目の指導）の活動の振り返りをおこない、子どもたちが裏声の出し方を思い出す。
- ② 子どもたちが映画などの中で見られるネイティブ・アメリカンの雄叫びの真似から、裏声と地声の違いを認識する。
- ③ 子どもたちが裏声と地声それぞれで歌唱をおこない、違いを認識する。
- ④ 子どもたちが大きな声を出さなくても、響きのある声であれば、声量が出ることを知る。
- ⑤ 響きのある声の出し方に子どもたちが気付く。

先に述べたとおり、本プロジェクトの発声方法は裏声（頭声）を用いて歌唱することを特徴としている。しかしながら、楽曲すべてを裏声（頭声）のみで歌唱できるわけでない。裏声（頭声）を使用するのは一定の音高より高い音であり、それよりも低い音は地声（胸声）を用いて歌唱しなければならない。よって、プロジェクトでは、以下のように到達目標を設定している。

- A) 子どもが普段使用しない裏声（頭声）を遊び通じて体験する。
- B) 子どもたちが裏声（頭声）と地声（胸声）を明確に認識できる。
- C) 子どもたちが裏声（頭声）と地声（胸声）を自在に出し分けることができる。
- D) 子どもたちが裏声（頭声）と地声（胸声）を使い分けながら歌唱することができる。

本時の活動では、前回（第2回目の指導）の活動で、到達目標A)をある程度達成できたことから、到達目標B)を中心に指導を展開し、指導のまとめの部分で裏声（頭声）と地声（胸声）それぞれで実際に歌唱し、到達目標C)への導入とする計画を立てた。ただし、ねらいの③～⑤については、「現段階でどこまでできるか（子どもたちが理解できるか）」という挑戦（実験）的な目標として設定した。

（２）指導手順

指導は以下の手順で実施した。

- ① 前回（第2回目の指導）の指導内容であるロケット発射の遊びを導入としておこなう。遊びを通じて、子どもたちが裏声を出す（思い出す）。
- ② 遊びの途中で「みんな楽しく遊んでいるので、お客さんが来た」という設定で、ネイティブ・アメリカン3名が描かれているイラストを子どもたちに見せ、お父さんインディアン、お母さんインディアン、子どものインディアンであることを説明する（活動の中では、わかりやすいように“インディアン”という言葉を使用。以下、本稿ではネイティブ・アメリカンをインディアンと表記）。
- ③ 子どもたちに、インディアンはどのように挨拶をするかを尋ね、子どもたちに映画の中で見るインディアンの雄叫び（以下、インディアンエールと表記）の手本を示し、真似をするように指示する。
- ④ 子どもたちが（自分なりに）ある程度真似をした後、お父さんのインディアンのインディアンエールを地声（胸声）で、お母さんインディアンのインディアンエールを裏声（頭声）を用いて手本を示し、子どもたちに真似するように指示する（図1）。

- ⑤ インディアンエールの声で、「夕焼け小焼け」（わらべ歌）を歌うように指示する。その際、裏声（頭声）と地声（胸声）それぞれの声で歌唱する（裏声は譜例1、地声は譜例2）。
- ⑥ 裏声（頭声）で「勇気100%」（作詞：松井五郎 作曲：馬飼野康二）のリフレイン部分を歌う（譜例3）。
- ⑦ 活動の締めくくりとして、裏声（頭声）の意識をもって再度「夕焼け小焼け」（わらべ歌）を譜例1の音高で歌う（⑦については、時間の都合により割愛）。

※活動の詳細については指導案（表1）を参照のこと



図1 インディアンエール（B 幼稚園での活動）

Musical notation for Example 1: A single staff in 4/4 time with lyrics underneath. The notes are mostly quarter notes and half notes.

ゆ や け こ や け あ した てん き に な ー れ

譜例1 夕焼け小焼け（わらべ歌）

Musical notation for Example 2: A single staff in 4/4 time with lyrics underneath. The notes are mostly quarter notes and half notes, with some eighth notes.

ゆ や け こ や け あ した てん き に な ー れ

譜例2 夕焼け小焼け（わらべ歌）

Musical notation for Example 3: A single staff in common time (C) with lyrics underneath. The notes are mostly quarter notes and half notes.

そ う さ ひゃくパーセントゆ う き も う が ん ば る し か な い さ

譜例3 勇気100%（作詞：松井五郎 作曲：馬飼野康二）リフレイン部分

表 1 5歳児第3回指導案（A幼稚園、B幼稚園共通）

内容	<p>前回の活動を復習する。 インディアンエールの声で歌う。</p>	ねらい	<p>高低それぞれのインディアンエールを行うことで、裏声と地声の区別を明確にし、それを歌唱につなげる。 子どもたちが大きな声を出さなくても、響きのある声であれば、声量が出ることを知る。 響きのある声の出し方に子どもたちが気がつく。</p>
子どもの活動		保育者の援助・留意点	
<ul style="list-style-type: none"> ● 前回の活動（宇宙船の打ち上げ）を思い出す。 ● 汽笛に意識を持ち、行進に参加する。 ● 前回と同じ活動（宇宙船の打ち上げ）を行う。 ● 消防車のサイレンの練習をする。 ● 消防車のサイレンに意識を持ち活動に参加する。 ● インディアンエールを知る。 ● 保育者の手本を真似てインディアンエールを行う。 ● 高低どちらのインディアンエールもできるように練習する。 ● 保育者の合図に合わせて、高いインディアンエール、低いインディアンエールを交互に繰り返す。 ● インディアンエールの声で歌う（夕焼け小焼けのわらべ歌を、高低それぞれの声で歌う）。 ● 高いインディアンエールの声のまま、「勇気100%」のリフレインの部分で歌う。 ● 保育者の指示に合わせ、頭声で歌唱する。 		<ul style="list-style-type: none"> ● 前回の宇宙船の打ち上げを覚えているか子どもたちに聞く。 ● 前回と同様に、「線路は続くよどこまでも」に合わせて、宇宙船の発射場に行く。その際、汽笛の真似をしっかりとるように改めて促す。また、場合によっては出発前に練習を数回行う。 ● 前回と同じ活動（宇宙船の打ち上げ）を行う。 ● 活動の前に消防車のサイレンの練習をおこなう。 ● 活動に際しては、消防車のサイレンのように高音で響かせることを意識させる。 ● 発射場にインディアンが現れたことを伝える。 ● インディアンを知っているか聞く。続けて、インディアンエールを知っているか聞く。 ● インディアンエールの手本を示す。手本は高い声のインディアンエールお母さんインディアン、低い声のインディアンエールとして両方示す。特に高い声のインディアンエールでは頭声を意識して手本を示す。 ● 高い声のインディアンエールと、低い声のインディアンエールをそれぞれ試すように指示する（高いほうはお母さんの、低いほうはお父さんのエールとする）。 ● 保育者の合図に合わせて、高いインディアンエール、低いインディアンエールを交互に繰り返すように指示する。 ● インディアンエールの声で歌ってみることを提案する（夕焼け小焼けのわらべ歌を歌わせる）。 ● 高いインディアンエールの声のまま、「勇気100%」のリフレインの部分で歌うよう指示する。 	

子どもの活動	保育者の援助・留意点
<ul style="list-style-type: none"> ● 裏声（頭声）の意識を持って「夕焼け小焼け」を歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 歌声がうまく揃わない場合は、インディアンエールの活動に戻る。 ● 最後に、きれいな裏声（頭声）で「夕焼け小焼け」を歌うように指示する。その際、裏声をしっかり意識させる。

Ⅲ. 考察

1. B幼稚園での活動

(1) 筆者のリフレクション

本時の活動は、前回（第2回目）の活動から夏季休暇を挟んだため、約2か月ぶりの指導となった。そのため、前回の活動内容を思い出し、裏声を出す遊びを本時の活動の導入とした。

前回（第2回目）の活動について、子どもたちが興味を持って参加し、かつ裏声（頭声）を出す（体験する）という目的が十分達せられたと述べたが⁴⁾、子どもたちは2か月後でも、前回の活動内容をよく覚えていた。筆者の「この前何をやったか覚えている？」という質問には、「ロケット」という声と同時に「もう一度やりたい」という声も出て、前回の活動が子どもにとって楽しく、興味をひく活動であったことが改めて確認できた。子どもたちはサイレンの真似を通じた裏声（頭声）もスムーズに出すことができ、前回の復習のための特別な指導は必要なかった。



図2 口の形

インディアンエールについては、子どもたちは非常に興味を示して参加していた。参観教員からも、「消防車のサイレンよりもインディアンエールを楽しんでいた」という意見が出された。

発声については、インディアンエールは「裏声（頭声）で歌う」という目的への効果は非常に高いと感じた。前回の活動の消防車のサイレンの真似では、裏声は出るものの、音の高低についてはばらつきが見られた。一方、インディアンエールでは、全員が同じではないものの、一定の音高に集まりやすい傾向が見られた。さらに、インディアンエールを通じて、自然に口の形が丸くなり、自らの声を共鳴させるために非常に適した形になることもわかった（図2口の形）。今回の活動では、先述の通り実験的に「子どもたちが大きな声を出さなくても、響きのある声であれば、声量が出ることを知る」、「響きのある声の出し方に子どもたちが気付く」の2つをねらいとして設けた。しかし、時間の制約や子どもたちとのやり取りの関係で、それらを十分に確認することができなかった。ただ、口の形に効果があったことは、響きのある歌声を追求していくうえで、今後の指導への大きな手がかりの一つになると考える。

「勇気100%」のリフレインの部分の歌唱については、指導者（筆者）の主観ではあるが、全員が裏声で歌唱できており、かつ音程のばらつきもほとんどなかったと考える。さらに、筆者が本来想定していた歌声（音色）に非常に近いものであった。特に音程については、以前拙稿で、幼児期の場合、裏声で歌唱するように指示すると、本来の出すべき音の1オクターブ上を出そうとする子どもが散見されること⁵⁾を指摘したが、今回の指導ではそのような問題は発生しなかった。先に述べたように、インディアンエールを通じて裏声を出すと、音高が一つの高さに集約されやすいことが、今回の成功の要因につながっているのではないかと分析している。

「勇気100%」のリフレイン部分を使って、子どもたちに裏声（頭声）で歌唱する感覚を掴ませる手法は、本研究の基礎となった小学校での歌唱指導で用いたものである。しかし、小学生の場合は、ピアノで基準となる音高を示せば裏声を一定の音高に揃えていくことが非常に容易なのに対し、幼児にはそれが難

しく⁵⁾、改善が必要な要点となっていた。よって今回実践した手法は幼児向けの歌唱メソッドの基本となることが期待され、今後も実証実験を続けていきたいと考えている。

(2) 参観教員のリフレクション

- 前回（第2回目）の活動では、声を出すよりも、ほかに楽しみを見出している子がいた印象であったが、今回は声の出し方に集中できている子が多かった。
- 今回はインディアンエールを通じて高い声が出ることを知り、確実にそれを生かすことができている子が多かった。
- まだ歌詞で歌うことが難しい子もいたが、歌詞ではなく「ア」歌ってもよいという指示の後は、多くの子どもが参加できていたのではないかと。
- 消防車（第2回目）の活動よりも楽しんでいる子が多かった。
- 音の高低に気が付き、普段使っていない自分でも知らなかった声を出すことができていた。
- 楽しく活動している印象ではあったが、「子どもたちが大きな声を出さなくても、響きのある声であれば、声量が出ることを知る」ことについては、十分目的が達せられていないと感じた。一方、「響きのある声の出し方に子どもたちが気付く」については、子どもたち自身が、どのような声がきれいか気付いて歌っていたように思う。

1. A幼稚園での活動

(1) 筆者のリフレクション

B幼稚園での実践が非常に順調で、十分な成果が得られたと考えたので、自信を持ってA幼稚園の指導に臨んだ。しかしながら、A幼稚園では予想していたような指導を実施することができなかった。

B幼稚園での実践と同様にインディアンエールをおこない、「勇気100%」を歌唱した。その結果、歌声に変化が見られ、今回ねらいとしていた裏声（頭声）での歌唱という観点では成果があったものと考えられる。

しかし、B幼稚園が一クラス20名程度の子どもたちへの指導であったのに対し、A幼稚園では学年全体の一斉指導の形態であったため、約60名の子どもたちへの指導をおこなった。今回は、裏声（頭声）の出し方をねらいとしていたため、何度も子どもたちに裏声を出させる場面があったが、60名が一斉に裏声を出すと指導者（筆者）の声が通らず、思うように指導を進めることができなかった。このことは、参観教員のリフレクションで見られるように、「ピアノの音で集中するとき」の合図の音を決めておくなど、子どもたちに指示が伝わりやすい工夫が必要であったと実感した。

さらに、現場の要望を十分に聴取していなかったことも反省点として挙げられる。A幼稚園の教職員は、もう少し子どもたちが普段歌っている季節の歌などの指導を希望されていたのに対し、筆者（研究者）は、とにかく裏声（頭声）での歌唱ありきで取り組んでいたため、この部分で齟齬が生じてしまった。もちろん、歌声づくりのためには手順が必要で、特に頭声発声を覚えるためには、まず裏声でなければ歌えない音域が高いフレーズを用い、裏声で歌唱する感覚をつかませる必要がある。よって、すべて現場の要望に沿えるわけではないものの、指導のありかた、手順、長いスパンでの計画をもう少し時間をかけて説明や相談をしておく必要があった。

(2) 参観教員のリフレクション

- 子どものけじめがつけられないので、ピアノの音で「集中するとき」の合図の音を決めてほしい。
- 勇気100%の歌だったが、歌えない子もいて折角の指導の効果が減ってしまう。使用する曲は前もって連絡してほしい。

- レッソンの前でも最後でもよいので、園で歌っている季節の歌の指導時間を何分か組み込んでほしい。
- ファルセットの指導もだが、童謡の音域の指導方法も私たちは悩みながら取り組んでいる。
- 普段の歌を一曲歌って、それに対して評価や指導をしてもらう形を希望する。
- 裏声の練習になり過ぎているのではないか。
- 歌詞が曖昧なのはよくない。

IV. まとめ

第3回目の指導では、歌唱の前段階で裏声を出した時に音程を一定の音高にそろえることに効果があったことは、大きな成果と考えている。この課題は研究を推進するうえで大きな難点であったため、歌唱指導メソッドの構築に向けた突破口となると考えている。

しかし一方で、A幼稚園の実践であったように、教職員との連携が不十分であったことは大きな反省点である。本研究は、現場で実用できる実践的な指導法の開発を目指してスタートした。研究の大きな目標として、保育現場の教職員と協働し、より子どもや園の実情や実態にあったものに仕上げていくことを挙げていたが、その大切な部分が抜け落ちていた。

筆者（研究者）の指導構想と保育現場の要望や実情をどのように合わせていくのか、今一度検討し、より丁寧に研究を進めていきたい。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP19K02665（基盤研究 C）の助成を受け、実施している。

注・文献

- 1) 長川慶（2017）：幼児の歌唱活動における問題点と指導のあり方 - 新しい歌唱指導法の開発にむけての基礎研究 -, 保育文化研究, 第5号, 85-98.
- 2) 長川慶（2013）：児童に対する発声指導についての一考察 - 基本となる発声についての考え方とその指導法 -, 新潟中央短期大学紀要 暁星論叢, 63号, 79-108.
- 3) 長川慶（2020）：発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと感性的表現力向上の取り組み - 4歳児への第1回目の指導とその考察 -, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要, 第19号, 119-126.
- 4) 長川慶（2020）：発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと感性的表現力向上の取り組み - 5歳児への第2回目の指導と考察 -, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要, 第20号, 65-71.
- 5) 長川慶（2018）：幼児への発声指導の実践と考察 - 頭声発声の有用性に着目して -, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要, 第17号, 191.

